

三重で芸術の秋巡り



荷葉(かよう)硯 明※

「喬松平遠図
(きょうしょう へいえんず)」
李成(りせい) 北宋※「隸書韻菊詩
(れいしょ じきくし)」
金農(きんのう) 清※

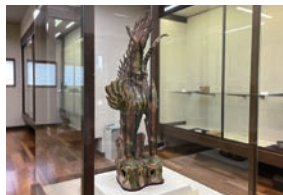
澄懷堂美術館

先人たちが守り受け継いだ、中国書画の世界観に浸る

平成29(2017)年に四日市市鶴の森から水沢町内に移転した「澄懷堂美術館」を訪ねると、風情ある庭や白壁の蔵などがあり、和風旅館のような趣です。「ここは猪熊信行(1906～1991)氏の邸宅でした」と教えてくれるのは、学芸課主任の井後尚久さん。お話の猪熊氏とは、同館を運営する「一般財団法人 澄懷堂」(里中俊雄理事長)の創立者。政財界で活躍した猪熊氏は、実業家・政治家として知られる山本悌二郎(1870～1937)が蒐集した、宋・元・明・清朝の中国書画の中から数百点を託されましたが、第



「澄懷堂美術館」入口※

「硯と桶の部屋」展示風景
中央には三彩の魍(き・伝説上の生き物)が展示されている。

展示室では巨幅を見下ろすことも可能



新展示棟の展示風景



井後 尚久さん

二次世界大戦の戦火から守るため、故郷の水沢町に移して大切に管理・保管。同館は、これらの後世に伝承し、文化振興に寄与したいとの猪熊氏の想いを受けて開館しました。なお「澄懷」とは、六朝山水画の始祖とされる宗炳(375～443)の言葉で、心を静かに澄ませて胸中の山水を築しむという意味です。山本翁は書齋を「澄懷堂」と名付けていたといえます。井後さんの案内で館内を見学すると、最初の展示室には、坂東貫山(1887～1966)が蒐集した古硯や猪熊氏収蔵の桶などが展示されていました。「桶

天高く、馬肥ゆる秋。慌ただしく移り行く日々の暮らしの中で、秋は、ほっと息つける季節といえます。スポーツや読書に加え、芸術鑑賞にも適しているといえるでしょう。今回は、県内で、さまざまな芸術・美術作品を堪能できる施設を6か所ご紹介します。この秋、じっくりと芸術作品と向き合ってみてはいかがでしょうか。

※各施設の開催および見学日時・料金・予約方法や受け入れ人数などには違いがあり、状況に応じて延期や休館する場合があります。事前に必ずご確認ください。

取材・文：中村真由美・中村元美
撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

とは、死者とともに埋葬された人形のことです」などと教わりながら次の展示室へ。すると、長さ350センチメートルほどの巨幅(大型の掛け軸)などが並び、圧倒されました。同室の一部は2層になっていて、上から見下ろすことも可能。異なる視点から鑑賞できるのも同館の魅力といえるでしょう。また、井後さんの的確で軽妙な解説のおかげで、中国書画が少し身近に感じられました。

本年4月には、新展示棟が開館し、さらに多くの作品を間近に見られるようになりました。10月1日(火)から11月10日(日)までは秋の展覧会も開催中です。この機会に、中国書画の世界観に浸ってみてはいかがでしょうか。

お問い合わせ

「澄懷堂美術館」

(展覧会開催期間は月・火・祝日定休)

TEL 059-3329-3335

●入館料

大人800円 高校・大学生500円

小・中学生300円(団体割引あり)

半泥子の精神が宿る、野外美術館のような窯場

仙鶴窯 (旧廣永窯)

【津市分部】



ダイナミックな造形に目を奪われる、土平氏作の灯籠

伊勢自動車を津ICで降り、西へ向けて車を走らせること約10分、のどかな里山を抜けたあたりに小高い山が姿を現します。地域の人々にハイキングコースとして親しまれている長谷山です。この山の麓に広がる「仙鶴窯」は、川喜田半泥子(1878~1963)が作陶に没頭しながら若手を養成するために開窯した「廣永窯」をもとに整備されまし

芸に関しては趣味の域を超え、今なお多くの人々を惹きつけています。約2万坪の広大な敷地内では、登り窯に加えて、半泥子の愛弟子で独自の作風を確立した坪島土平(1929~2013)氏の作品も見られます。豊かな緑の中には土平氏が制作した灯籠も点在し、まるで野外美術館のようです。

「仙鶴窯」は、「ギャラリー仙鶴」に予約

た。川喜田半泥子といえば、江戸時代から続く津の旧家に生まれ、実業家として活躍した一方で、陶芸・茶の湯・写真・書画・俳句など、多様な趣味を持つ数奇者として知られた人物。中でも陶

すると、係の方の案内で見学することが可能です。この日は「株式会社ちとせ」企画室室長の高橋千尋さんに案内していただき、総門をくぐり奥へと進みます。すると、趣の異なる建物が現れ、それぞれに半泥子が揮毫した扁額が掲げられていました。隅々にまで半泥子の精神が宿っているのを感じます。その中でも特に遊び心満載の仕掛けが施されているのが「泥仏堂」です。厨子の中に半泥子作の陶像が鎮座し、観音扉の内側に「把和遊」「喊阿嚴」の文字が描かれているのです。つまり、「How are you?」(元気ですか?)「Come again」(また来てね)という意味。誰もが思わ



「仙鶴窯」総門



「ギャラリー仙鶴」

ずクスツと笑ってしまふことでしょう。

高橋さんには、半泥子自らが設計してノコギリやノミをふるったという茶席「山里」や、半泥子没後にゆかりの建物を移築した「山の館」、「坪島土平記念館」(幽照館)なども案内してもらいました。



「陶斎」

と名付けた部屋があり、今にも本人が現れて、穏やかな笑顔で語りかけてくれそうでした。また、鮮やかな色彩の絵柄が目を引く大皿や、象嵌が施された複雑な形の大壺などが展示され、いずれの作品からも迫ってくるものを感じました。「パタリティがあつて、何ごとにも意欲的な人でした」と在りし日の土平氏について教えてくれるのは、陶芸家の藤村州二さんです。土平氏の直弟子として修業を積み、今も半泥子の精神を受け継ぎ



陶芸家の
藤村 州二さん

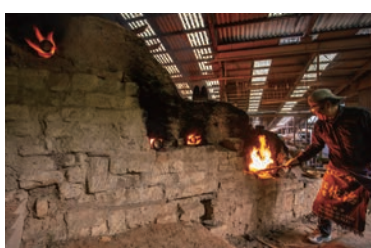
ながら、同窯場で作陶に励む日々を過ごす藤村さん。東京や大阪の百貨店などで定期的に個展を開催するなど、高い評価を得ています。

なお「仙鶴」とは、半泥子が愛した言葉で、江戸時代の茶人で俳人でもあった堀内仙鶴にちなんでいますが、「千客万来」の意味も込められています。家族や友人たちと訪ねれば半泥子もきっと喜ぶことでしょう。

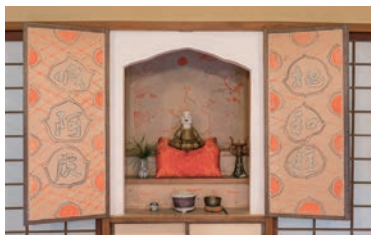
お問い合わせ

「ギャラリー仙鶴」(土・日・祝日定休)
TEL 059-1221-7120

●窯場見学は事前予約が必要です。



登り窯の火入れ風景 ※



「泥仏堂」※



茶席「山里」※



「坪島土平記念館」外観



「金霧彩象嵌禽獣文
(ぎんむさい ぞうがん ぎんじゅうもん)
三角捻り花器」

伊勢商人・川喜田家と
京商人・柏原家の絆と美意識

石水博物館

【津市垂水】



第2展示室では「所蔵品展 川喜田半泥子の作品と季節の館蔵品」を開催

川喜田半泥子の作品で知られる「石水博物館」。この秋は、京都市東山区にある「洛東遺芳館」所蔵の名品展「京商人の

美意識」(11月17日(日)まで)が開催されています。「洛東遺芳館」は、江戸店持ち京商人として知られる柏原家の旧宅にあり、同家に伝わる品々を公開しています。石水博物館学芸員の桐田貴史さんに伺うと、「幾多の大火を免れたお蔵の深い館で、京の豪商ならではの品がたくさんあり、今回の展示も、ほとんどが初めて京都を出た収蔵品ばかりです。京の雅と商人の文化を感じていただけたと思います」とのこと。三重県初出展の逸品に出合える展覧会です。

「江戸時代には豪商と呼ばれるような商家同士が縁戚関係を結ぶことが多く、京の柏原家と津の川喜田家も縁戚です。元治元(1864)年、半泥子の祖父で石水博物館の名称の由来ともなった14代久太夫(政明、号・石水 1822~79)の末弟、久四郎(1840~1916)が柏原家に養子に入り、9代柏原孫左衛門を襲名しています。その後も両家は親しく交流し、その孫である10代孫左衛門(弥一郎 1897~1984)と半泥子は

仲が良く、仕事上の付き合いだけでなく、趣味の情報などもやり取りしていたということですね。両家が長い年月をかけて築いた信頼関係によって、今回の展覧会が実現したのです。



学芸員の桐田 貴史さん

展示室でひと

きわ華やかに目を惹くのは、四

ツ目菱の家紋が時絵された「貝桶」とそれに入

れた「合わせ貝」。

京を代表する豪商であつた那波家から柏

原家に嫁いできた夫人の嫁入り道具の中の一品

です。18世紀に

から京に拠点を移した三井家は円山派のパトロンでしたし、松坂の小津家にも多くの丸山派の絵画があったといわれています。写実的な画風が商人の現実的な気質と合っていたのでしょう。



「貝桶」と「合わせ貝」※



那波家からの嫁入り道具の一つ「お歯黒道具」※

作られたこの道具類は、大名道具に匹敵する豪華さで、棚や化粧道具などがすべて揃っているとのこと。『貝桶』は、京商人ならではの好みを示す優美な品といえます。伊勢国を代表する豪商の一つであった

人の志向の違いを示しているのかもしれない。また、円山応挙など円山派の絵画も目を奪う品々です。「円山派の絵画は京商人にも伊勢商人にも好まれ、松阪(松坂)

から京に拠点を移した三井家は円山派のパトロンでしたし、松坂の小津家にも多くの丸山派の絵画があったといわれています。写実的な画風が商人の現実的な気質と合っていたのでしょう。

江戸でも上方でも活躍し、時代を牽引した商人たちの哲学と美意識が結晶したかのような美術品の数々。京商

人と伊勢商人の文化の共通点も相違点も感じられる展覧会です。

お問い合わせ
「石水博物館」(月曜休館)
TEL 059-227-5677
●入館料
一般500円 学生(高校生以上)300円
中学生以下無料

お問い合わせ

「石水博物館」(月曜休館)

TEL 059-227-5677

●入館料

一般500円 学生(高校生以上)300円

中学生以下無料

「貝桶」など
は見当たり
ません。雅
な都の文化
を背景に持
つ京商人と
質実を旨と
した伊勢商



「郭子儀図(かくしぎず)(部分)」
岸駒(がんく)※

「虎図(とらず)(部分)」
円山応挙(まるやまおうきよ)※



「猛虎図(もうこず)(左隻)」宋紫石(そうしせき)※



「孔雀図(くじゃくず)(部分)」
呉春(ごしゅん)※

コレクターと学藝員が開いた
心に効く美術館

サイトウミュージアム

【松阪市魚町】



落ち着いた展示室。左回りに観覧する



「サイトウミュージアム」外観
松阪駅から徒歩8分の距離

(2017)年。三重県立美術館

に学芸員として勤務していた田中さんが、展覧会に出す作品を借りるため齋藤さんを訪ねたことに始まります。齋藤さんは、知名度よりも自身の感動や作家のひたむきな情熱などを重要視して作品を集める一方、美術の力で医療環境をより良くするホスピタルアー

トにも取り組んでいました。その中で、集めた絵画を人に見てもらわないでいるのは、作者や作品に対して失礼なことではないだろうかと自問を重ねていたと言います。話し合ううちに二人は意気投合。コレクションをつぶさに見て、そのレベルの高さを実感した田中さんは県立美術館を辞して、齋藤さんの美術館を開く準備を始めました。



学藝員の田中 善明さん

松阪市の中央、魚町にある白い瀟洒な建物がある「サイトウミュージアム」。精神科医である齋藤洋一さんの収集した作品を展示する私設の美術館です。「約3000点に上る収集品の中から、展覧会ごとにテーマに合うものを選んでいきます」と教えてくれたのは、学藝員の田中善明さん。館の開設準備以来、オーナーの齋藤さんと二人三脚で現在に至ります。

二人の出会いは平成29

しすぎる日本近代の絵画「味わう静物画」嵐山、そして水のある風景」など、興味深い企画展が続けられています。

館内に入ると、展示室は淡いグレーと白で統一された落ち着いた空間。「絵に

集中してもらえよう、天井の高さや照明などにこだわりました。また、先入観なく作品に接してもらえよう、作者名や解説が作品の後になるように展示しています」。ガラスなどの覆いが無く、近い距離でじかに絵を見ることが出来るのも魅力の一つ。静かな展示室で一枚一枚の作品をゆっくり見ていると、絵の中に誘われていくような感覚になり、さわやかで好きだと感じる一枚の前では気分も爽快になりました。音楽が



「少女像」深沢 紅子 ※



「海(日の出)」藤島 武二 ※

「The Signified or If IV 意味されるものあるいはもしも No.4」荒川 修作 ※



「DENT PROMPTE」マックス・エルンスト ※

聴く人の気持ちを変えるように、絵画も見る人の精神に作用し、心を静めたり、元気を与えたりするのでしょう。

この秋の企画展は、「題名の無い絵画展2024」(10月27日(日)まで)。今までの展示会とは趣向を変えて、1階の展示室には田中さんが、2階には齋藤さんが選んだ作品が並んでいます。お二人の個性や志向の違いなどが感じられる興味深いラインナップです。「今回の展示には作品解説を付けず、見る人それぞれの目と心で感じてもらうと考えています」と田中さん。

訪れればきっと、「好きだなあ」と感じられる作品と出合うことができるでしょう。あなたの心に効く1枚に出合いに行きましょう。

お問い合わせ

「サイトウミュージアム」(月・火・水・曜休館)
TEL 0598-21-1111

●入館料

一般500円 大学・高校生300円
中学生100円 小学生以下無料

※印の写真は取材先から提供していただきました

青山の風景をこよなく愛した水墨画家により建設

伊賀市ミュージアム

うたのいえ

青山讃頌舎

〔伊賀市別府〕



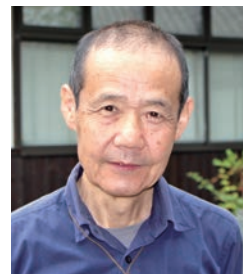
穂月 明さんの作品と古美術品、パネルを合わせて72点を展示

その麓は自然豊かなエリアで、木津川に並行して初瀬街道が通り、見どころも多いまちです。地震除けの守り神「要石」で知られる大村神社のそばに、純日本建築の「伊賀市ミュージアム青山讃頌舎」があります。元々は水墨画家の穂月 明さんが建てた美術館（青山讃頌舎美術館（日月舎）で、自身の作品や収集した古美術を公開していました。名称は穂月さんが青山の豊かな山河を称えて、命名しました。

穂月さんが亡くなられた後は、遺族が伊賀市に寄贈。市で初めてとなる美術作品の展示施設として開館しました。

「穂月の作品をみてもらう通常展と、ほかの作家さんの特別展で、年に6回ほどの企画展を行っています。展示ごとにすべての作品が入れ替わります」と、穂月さんの長男で同ミュージアムの学芸員・穂月 大介さん。取材で訪れた際の企画展「神が息づき仏が導く・穂月明と仏教美術の世界（伊賀市文化都市協会主催）」を案内していただきました。

このときに初公開となった「若宮八幡神像」は、穂月さんの収集品の一つで、鎌倉時代末期から南北朝時代の作品とみられ、昨年3月に市の文化財指定を受けました。「描かれている貴公子は八幡神（応神天皇）の若宮であることから、仁徳天皇とされ、天皇のみ許された装束を着ています」。同絵画を始め、穂月さんが神仏をテーマに描いた作品、神仏習合の時代の仏教美術や民間信仰についての



学芸員の穂月 大介さん

「青山町は、かつて三重県名賀郡に存在した町名。平成16（2004）年の合併後、伊賀市となりましたが、青山高原と



絵葉書 「若宮八幡神像」
伊賀市指定文化財



宝蔵寺の大般若経と
「大般若経守護十六善神」 穂月 明

コレクショ
ンが並び、
また同じく
市指定の文
化財となっ
た大村神社
の梵鐘「虫
喰鐘」をパ
ネルで解説。
未指定でも
宝蔵寺所有の大般若経六百巻など、貴重な文化財に詳しい解説を添え、地元に残る神仏の世界の一端を紹介しました。
穂月 明さんは昭和4（1929）年、和歌山県高野山の生まれ。京都市立美術専門学校（現・京都市立芸術大学）で日



「鍾馗(しょうき)図」 穂月 明

本画と洋画の基礎を学ぶも、卒業間近に見た中国清朝の文人画家「金冬心」に深い感銘を受け、独学で水墨画に転向します。師に付かず、派閥に属さず、賞も断つて画業に専念し、独自の絵画世界を築きました。青山の風景をこよなく愛し、52歳で伊賀に移住。「作品を描くために静かな落ち着いた環境を求めていたのでしょう。ここは自然を壊すことなく開発に躍起にならない景色が守られている場所です」と大介さん。作品には菩薩像や野の仏などの仏画をはじめ、風景や動物、花など、さまざまな水墨画があります。中でも寺で生まれ育った穂月さんにとって仏画は特別なテーマ。その独自の画風に魅了されるファンが今も

多くいます。

コの字型に設計された館内は、奥行きのある展示に活かされ、また離れの茶室は、穂月さんが柱の木や天井材、壁土などを何年もかけて集めて完成させました。庭園には石像があちこちに展示され、自然を大切にしたい美意識の詰まった空間が広がっています。



茶室の壁には
伊勢暦（いせごよみ）を



石像が展示された庭園

お問い合わせ

「伊賀市ミュージアム青山讃頌舎」(火曜休館)
TEL 0595-521-2100

入館料

一般300円 18歳未満無料

緑豊かな倉田山の地に当代美術の粋が結集

式年遷宮記念 神宮美術館

【伊勢市神田久志本町】



展示室2は書院造の様式で和の空間

無形文化財保持者(人間国宝)といった、名だたる作家の作品を収蔵・展示しています。コレクションの特徴は、全てが神宮に奉納された作品であるということ。展示される芳名帳には、献納式に来館した作家の、直筆署名を見ることができ

となっていますが、そもそも美術作品が奉納されたのは、昭和28(1953)年の第59回式年遷宮がきっかけだったようです。「戦後の遷宮は国家の手を離れ、主軸は国民の奉賛に移行して行われるようになりました。そんなとき芸術家の方々から作品を売って遷宮費用にというありがたい申し出があり、結果的に売却することなく遷宮を行うことができたのですが、そのことにならって各種美術作品が奉納されています」。

そのジャンルは日本画、洋画、彫塑をはじめ、版画、書、また陶芸、染織、漆芸、金工などの工芸と、多岐にわたります。これほど異なる分野の一品品が集まり一度に鑑賞できるのは、貴重な機会といえるでしょう。

建物は日本藝術院会員の大江宏(1913~1989)による設計で、枯山水庭園にせり出した、勾配屋根を持つ和風の現代建築。丸みを帯びた唐破風屋根の入り口から足を踏み入れると、エントランスはカーブを描いた天井で、ゆっ

ます。「式年遷宮を奉賛し、当代を代表する作家の方々から真心のこもった作品が寄せられ、現在約500点を収蔵しています」と神宮司庁文化部・学芸員の中村潔さん。日本の美術工芸作品の歩みを展望する美の殿堂をめざし、当代美術の粋を一堂のもとに鑑賞できる展示内容

伊勢神宮の内宮と外宮のほぼ中間地点にある倉田山は、別宮の倭姫宮が鎮まり、緑あふれる憩いのゾーン。一帯は「倭姫文化の森」として遊歩道も整備されています。ここに平成5(1993)年、第61回神宮式年遷宮を記念して創設されたのが「神宮美術館」です。文化勲章受章者・文化功労者・日本藝術院会員・重要



日本庭園とマッチする和風建築

たりとした贅沢な空間です。また木をふんだんに使い、木目を活かした内部のデザインが和やかな雰囲気を出し、休憩

室や展示廊の広い窓からは光が差しこみ、明るく開放的。庭園や森の景観に寛げる、まさに自然と調和した美術館です。

展示スペースは2つ。大きな作品が見応えのある展示室1と書院造を思わせる和を活かした展示室2があり、どちらも作品とじっくり真剣に向き合えるよう工夫されています。

毎年、奉納された作品を紹介する収蔵展と宮中で開かれる歌会始(うたかいのはじめ)をテーマにした企画展が開催されています。「歌会始の御題に合わせた特別展を平成8(1996)年から行い、毎年の嘉例としています。今年の御題の『和』にちなみ、この夏にアプローチを二つに分けて作品を展示しました。また令和5年度に奉納のあった8名の作家による14点を、特

集展示(12月24日(火)まで)しています」と中村さん。鑑賞後には「美術館四季のこみち」を散策し、また敷地内の「神宮徴古館」と「神宮農業館」にも立ち寄ってみてはいかがでしょう。紅葉や桜と季節の変化を楽しめる森の中、芸術に触れ、神宮への見識も深まるスポットです。

お問い合わせ

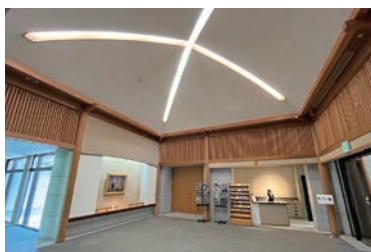
「式年遷宮記念 神宮美術館」(木曜休館)
TEL 0596-122-5533

●入館料

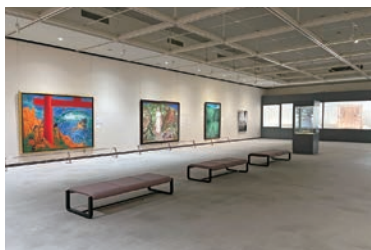
大人500円 小・中学生100円
(3館共通券700円)



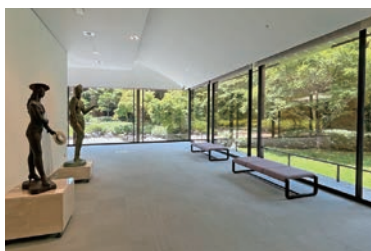
神宮美術館を訪れた作家の芳名帳



絵葉書や図録を販売するエントランス



広々とした空間の展示室1



中庭を望む展示廊に2つの彫塑作品



季節を愛でる「美術館四季のこみち」